

本書は、わが国における軍縮・不拡散問題の第一人者である著者が、「軍縮国際法の体系的な構築を目的として、…主として冷戦後の軍縮問題を体系的にまとめたもの」であり、その研究活動の中間的な集大成である。当該分野において、日本を代表する書物の一つとなることは間違いない。そして、軍縮・不拡散問題の研究に従事している者はもちろん、これからこの問題の勉強を始めようと考えている者にとっても必読の書である。

本書では、まず、軍縮国際法が総論的に分析され、過去100年の軍縮問題の全体像が論じられている。続いて、著者の専門分野である核問題に関して、核兵器の削減、不拡散および実験禁止はもちろん、非核兵器地帯や核兵器の使用禁止、米国の核態勢見直し(Nuclear Posture Review)も取り扱われ、重要なほぼすべての領域がカバーされている。さらに、生物・化学兵器の禁止と規制、ならびに人間の安全保障と主に通常兵器軍縮との関連が考察され、最後に「21世紀の核軍縮」に関する著者の問題提起と、厳しい状況であるものの国際社会は積極的に核軍縮を推進すべきであるとの提言がまとめられている。

軍縮・不拡散問題は、「学際的な分析が必要とされる」(著者)という難しさを孕んでいる。軍備を直接取り扱う、すなわち

可欠である。他方で、これまでに、軍縮・不拡散問題に関する様々な条約や協定がまとめられてきており、当該問題を把握するにあたっては、これら軍縮国際法の正確な理解が必須となる。本書は、軍縮国際法をベースにまとめられ、「法の支配」の重要性が論じられているが、同時に軍縮・不拡散を取り巻く国際政治の動向、すなわち「力の支配」の側面についても、バランスよく論じられている。

また軍縮・不拡散問題は、語弊を恐れずに言えば、偏った見方から、あるいは感情論的に、十分な分析や検討が加えられることなく論じられることが少なくない。そのようななかにあって、本書では、深く、かつバランスの取れた分析や洞察に支えられた議論が展開されている。

以上のような「バランス」が、「国際の平和と安全」を希求する筆者の信念と、その信念に基づく主張とに、大きな説得力を持たせているのだと思われる。

あえて注文するとすれば、依然として急速に変容し続けている軍縮・不拡散問題の新たな動向をいかに分析・考察すべきか、ならびに日本および国際社会は軍縮・不拡散問題にどのように取り組むべきかについて、一日も早く、次なる「中間的な集大成」を示して頂きたいということである。

戸崎洋史(日本国際問題研究所 軍縮・不拡散促進センター 研究員、軍縮・不拡散問題)

WHOで勤務する国際公務員
服部 あさ子 さん (D3)

OSIPP で得た国際人権法の 専門知識をフルに発揮

OSIPPの博士課程に席をおきながら、国連の専門機関の一つ、WHO(世界保健機関)本部(ジュネーブ)で働いている。Director-General's Officeの下にある、Strategy Unit・Health and Human Rightsのチームに所属。主な仕事は、国連人権条約機関とWHOの間の相互交流をコーディネートすることで、具体的には、WHOが国連人権条約諸機関に出す報告書の取りまとめ、また、国連条約機関の出す勧告をWHO内の各部局、事務所などで生かせるようなツールの開発などに携わる。

「人権に関わる仕事がしたい。アカデミックよりは実務で、かつ広い国際的な視野が得られるような」

と、国際機関、NGO、外務省専門調査員などに片っ端から応募、半年間のILO(世界労働機関)でのインターンシップ、ILOの短期コンサルタントなどを経て、01年からWHOに採用された。

1996年、OSIPPの修士課程に入学、村上正直教授の指導のもと、一貫して国際人権法の分野を専攻してきた。修士論文では、ILO強制労働条約の「従軍慰安婦」問題への適用の可能性について分析した。OSIPPで勉強した、国際人権法、及びその実施制度に関する基礎的かつ体系的な知識が今の仕事に大変役立っていると言う。

スイス暮らしというと一見イメージはいいが、文化の相違や高い物価をはじめ、生活上の苦勞は少なくない。特に、安定した雇用のない状態で、ジュネーブで住居を探すのは大変だったと言う。しか

しその中で得た、「精神的にも物理的にも支えてくれる、国籍を超えた多くの友人との信頼関係」は、仕事上でも、海外での生活基盤を確立していく上でも、必須の基盤となっている。

「新しいことに挑戦しようとするとき、誰も今の生活から失われる可能性のあるもののことを考えて不安になるものだけれど、実際にやってみると失うものよりも得るもののほうが多いことの方が多い。変化を恐れないで」というのが、国際社会で活躍している人々から共通して聞く教訓だと言う。「私はいつも、このメッセージに励まされています。ぜひいろいろなことに積極的に挑戦してほしい」。後輩に向けた言葉には、はつらつとした、充実感がみなぎっていた。

院生群像